OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	バジュータの星 : ダトーガの女性の結婚と相続
Author(s)	稗田, 乃
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 1997, 7, p. 105-120
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71088
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

バジュータの星

－ダトーガの女性の結婚と相続－[1]

稗田　乃

１．１　はじめに、そして、フィールドに出発する

梅棹１９９０ｅに記録されたダトーガの物質文化のなかに、ダトーガの女が肩から背にはおる皮のコートの図がある[2]。なめした山羊皮からできており、表面には下部に上弦の三日月のような模様とその上部に二重の同心円からなる模様と、これらの左右には同様の三日月模様や長方形からなる幾何学模様が描かれている。ダトーガの女達の日常生活では、この肩コートが使用されるのを観察することはない。儀礼などでのみ使用される。この皮コートは、ダトーガの既婚女性が身につけている皮のスカートと同様に、ダトーガ文化のなかで重要な位置を占めていると考えられる[3]。

１．２　フィールドで質問する

フィールドワークを開始してすぐに、ダトーガの肩コートに描かれた三日月模様はそのまま実際の三日月を表わしており、二重の同心円模様は星を表わしていることが、聞き取り調査で分かった[4]。これら以外の幾何学模様は、なんら意味をもっていないということが分かった。このときの聞き取り調査では、これ以上のストーリーの発展はなかった。ただし、ダトーガの氏族のひとつであるバジュータ氏族の女だけがこの模様を使用することが分かった。しかし、写真にとるためバジュータ氏族の女達に皮コートを持ってきてもらったが、それらの皮コートのどのひとつにも三日月模様と星の模様が描かれていない。三日月模様と星の模様が描かれた皮のコートを着用するのは、バジュータの女に限られているが、すべてのバジュータの女がこの模様を描いた皮コートを着るわけではない。バジュータ氏族に属する第１妻のみが、三日月模様と星の模様を描いた皮コートを着用することが義務づけられている。第１妻以外のバジュータの女は、この模様が描かれた皮コートを着用する義務はない。三日月模様と星の模様を描いた皮のコートが観察できなかったのは、偶然、調査者のまわりにバジュータ氏族の第１妻がいなかったからである。

その後のある日の夕暮にアシスタント（バジュータの女）に夕食の準備をさせながら、西の空を眺めていると、そこに皮のコートに描かれた模様が現われたのである。西の空に太陽が沈むころ、その太陽が去ったあとに上弦の三日月が現われたのである。新月が過ぎ、月齢３くらいの月であったろう。この三日月から中天に向かう直線上に大きな星が浮かんでいる。宵の明星である[5]。残照のため、この三日月と宵の明星以外はどの星も空には見えない。まさしくバジュータの肩コートに描かれた模様と同じものが、中天に浮かんでいるのである。この三日月は、沈んだ太陽をおいかけるように１、２時間後には西の山裾に沈む。三日月が沈むと、空一面の星が息を取り戻したかのように現われ、金星は、他の星屑のなかにまぎれこんでしまう。こうして肩コートの図柄が空に見えるのは、日没後の１、２時間のあいだにすぎない。翌日も日没後に前日と同じように肩コートの図柄が、西の空に現われる。しかし、三日月と宵の明星との間隔は、かなり狭まっている。翌々日になると三日月と宵の明星が重なっているか、あるいは、三日月の明るさの故に、あまりに三日月に近付きすぎている宵の明星は見えない。さらに次の日になれば、三日月と宵の明星の位置関係は逆転してしまい、三日月のほうが宵の明星よりも高い位置に現われる。このようにバジュータの肩コートに描かれる図柄、「バジュータの星[6]」が西の空に現われるのは、新月から数えて２、３日のあいだでしかない。さて、空に現われた皮コートの図柄を指し示す調査者に、アシスタントのバジュータの女はつぎのように語った。バジュータの女達は、毎月、この三日月を見て、この三日月に向かって、孫、ただし、男の子の誕生を祈るのであると。毎月、繰り返される月の満ち欠け、とくに、新月の闇から現われる三日月に、再生のイメージをダトーガの女達は見ているのであろうか。

しかし、なぜバジュータの女達は、孫の男の子の誕生を祈るのであろうか。孫の女の子でもなく。また、孫ではなく、子の誕生を、バジュータの女達はなぜ祈らないのであろうか。

祖父と孫の男の子との関係が親密な関係であることは、人類学ではよく指摘されている。年令組織をもつ社会では、祖父と孫が同じ名前の年令組に所属することが指摘されている。ダトーガも年令組織をもっている。しかし、ここで調査者が観察したのは、祖父と孫の男の子との関係ではなく、祖母と孫の男の子との関係である。これは、人類学で指摘する年令組織との関連で説明のつかない事象と考えられる。祖母と孫の男の子との関係を説明するためには、女の一生を明らかにしなければならないであろう。

２．ダトーガの女の一生、結婚と相続

２．１　調査地の概要

ダトーガの女の結婚と相続について語るまえに、調査地の概要とダトーガの人々の生活について簡単に述べておこう。調査は、タンザニア北西部、アルーシャ地区、エヤシ湖の北東に位置するマンゴーラ村で１９９６年１１月と１２月に行なった。マンゴーラ村は、日本のアフリカ研究者にとってはあまりにも有名な場所であろう。１９６１年に日本のアフリカ研究者がはじめてアフリカでフィールドワークをはじめた場所である[7]。現在のマンゴーラ村の民族構成は、１９６１年当時のそれとは基本的に変化していない[8]。マンゴーラ村を構成する民族は、今でもハッツァ語を話す人々とダトーガを話す人々とイラク語を話す人々とさまざまなバントゥ語を話す人々である[9]。かれらの共通語としてスワヒリ語が話されている。

マンゴーラ村は、豊富に湧き出る地下水を利用して農業の村として、とくに換金作物としてタマネギを栽培することで発展してきた。１９６１年は、潅漑によるタマネギ栽培が始まったばかりであった。当時のマンゴーラ村は、ブッシュのなかにダトーガの家囲いが散在する程度であった。いまではタンザニア各地から賃金労働者として農業に従事するために，多くの、そして、さまざまな言語を話す人々が流入している。現在の村の人口は２万人をこえると言われている。村は、人口増に合わせて、行政区分を東西に２分割した。著者がフィールドワークを行なったのは、東の行政区分の役所がおかれているガンデンダ（Ｇｈａｎｇｄｅｎｄａ）集落である。

栽培面積の拡大と、人口増による建築材と薪のための森の伐採により、村周辺の自然環境は大きく変化してしまった[10]。森の消失のため、ますます乾燥した砂まじりの強風が、１年中、朝凪と夕凪の時刻とをのぞいて１日中吹き荒れている。ダトーガの家畜の給水所となっていた泉は、その一部を除いてはコンクリート製のダムによってふさがれ、泉のまわりでダトーガの家畜を観察することはできない[11]。

ハッツァの人々は、狩猟採集民と言われている。がしかし、いまやマンゴーラ村の周りでは獲物となる動物の姿はない。食料となる実をつける木は、農地の拡大のため伐られ、ハッツァの人々の食料難の嘆きは大きい。ハッツァの人々の主な現金収入源は、観光客である。地球最後の狩猟採集民を見るという触れ込みで、欧米から観光客がやってくる。もちろん狩猟はいまではほとんどなされていない[12]。

イラクの人々は、過去から半農半牧の生業形態をとっていて、この半乾燥地帯に最も適

応した生活を送ってきた人々といえよう。しかも、ダトーガの人々と長期にわたって関係を保ちながら、ダトーガの人々を徐々に追いやる巧みな戦略を持ち合わせている[13]。イラクの人々は、ダトーガの人々を追い払い、すこしづつ生活の領域を拡大している。マンゴーラ村においてもタマネギの栽培から得た資金を用いて、トラクターの導入、商店の開業、ディーゼルエンジンを用いた機械による穀物の賃つき業などを行い、小資本家といった体のイラク人が登場している。

近年にますます多くの、さまざまなバントゥ語を話す人々が、マンゴーラ村に流入している。農業労働に従事して賃金を得る者、得意な炭焼きの技術を生かして村周辺の林で焼いた炭を村で売る者、集落に一ヶ所ある市場で野菜、果物を売る者、キオスク（紅茶と揚げパンや蒸し芋を売る店）やホテリ（食堂）や飲み屋を開業する者、タマネギの買い付けにくる者、中古車で乗り合いタクシーをやる者など、多くの人々がタンザニア各地から流入している。古くからマンゴーラ村の開拓に寄与した農耕民は、自らをスワヒリ人と呼び、新しく流入した人々とは、異なるアイデンティティを持っている可能性がある。これら流入してくる人々とともに、適応力のあるイラクの人々と、そして、いわゆるスワヒリ農耕民が、マンゴーラ村の急激な変化を担う人々であることは間違いない。

２．２　ダトーガ社会の概略

前節では、ダトーガの人々をのぞくマンゴーラ村の社会を構成する人々の生活について概観した。この節ではダトーガの人々の生活を概観する。

ダトーガ語は、ナイル・サハラ言語群のなかのナイル諸語を構成する３つの方言群の１つ、南ナイル方言群に所属している。１９４８年の人口統計によれば、ダトーガ語の話し手の数は、２１、６１８人である[14]。ダトーガ語は、広く分散して、マラ、シニャンガ、アルーシャ、タボラの４つの地区で話されている。その多くは、アルーシャ地区のンブル県に集中している。ダトーガの人々は、基本的に牧畜民であり、その一部は、いまでも移動を続けている。いまでは国境をこえて、隣国のザンビアにまで到っていると言われる。

ダトーガの人々の歴史は、最近の移動と地域集団の生成の歴史をのぞいて、古い過去に遡る歴史は明らかではない[15]。１千年ほど前にダトーガの人々は、カレンジン祖語の 話し手から分かれて、北タンザニアに到着したという説がある[16]。しかし、筆者による 言語調査から、ダトーガ語は、南ナイル方言群に所属する他の言語とは以前に考えられていたほどは、違いがないことが分かってきた。このことから、ダトーガの人々が、他の南ナ

イル方言群に所属する言語、たとえば、カレンジン諸語を話す人々から分かれて、タンザニア北部に到着したのは、以前に考えられていたように１千年前というような古い時代のことではないと言える[17]。１９世紀半ばに、ダトーガの人々は、マサイの人々によってンゴロンゴロクレーターとセレンゲティ平原から追い出された。マンゴーラ村近辺にダトーガの人々が到着したのは、１９４０年代であったろう。この時、マンゴーラ村近辺に移住したのは、ダトーガの人々だけではなく、イラクの人々やバントゥ農耕民も含まれていた。むしろ、この地域からマサイの人々が北へ後退したときに、まっさきに入植したのは、バントゥ農耕民であった。

ダトーガの人々は、基本的には牧畜民である[18]。植民地時代とそれにつづく時代にとられた農耕民への優遇的な政策により、ダトーガの人々は、より乾燥した、生産性の低い土地に追いやられている。また、近年までの度重なる飢饉により家畜の数を急速に減らしている。マンゴーラ村近辺での家畜の数が減少した理由は、飢饉だけではなく、むしろ、バントゥ農耕民の増大からくる、耕作面積の拡大に伴う森林伐採による自然環境の変化であろう。また、マンゴーラ村近辺に住むダトーガの人々は、他の地域に住むダトーガの人々と較べて、泉の水による潅漑耕作地の存在のため、より強く農業に接近したと考えられる。農業に接近することで、彼らは生きのび得た。いま、泉のまわりの潅漑耕作地のなかに、ダトーガ所有の耕作地を見つけることができる。

１９６３年当時の世帯あたりの牛の数が、梅棹１９９０ｄに記録されている。マンゴーラ村近辺に住むダトーガの所有する牛の数、ただし、成牛のみの数である。ダトーガの家畜群は、山羊と羊の小家畜と牛からなる。牛の群れの構成は、成牛の総数の約１割弱の数の種牛と去勢牛をのぞけば、あとは雌牛からなっている。

表１　１９６３年のダトーガの牛の数[19]

世帯	成牛の頭数	地名
Ⅰ	１５頭	Ｇｉｌｅｕｄａｂａｓｈｔａ
Ⅱ	２２頭	Ｇｈａｎｇｄｅｎｄａ
Ⅲ	２９頭	Ｇｈａｎｇｄｅｎｄａ
Ⅳ	９２頭	Ｇｈａｎｇｄｅｎｄａ

一方、現在のダトーガが所有する牛の数は、表２のようになっている。

表２　１９８７～８９年のダトーガの家畜の数[20)]

頭数	０～９	１０～１９	２０～２９	３０～３９	４０～４９
世帯数	１１％	２１％	１６％	４％	１１％

頭数	５０～５９	６０～６９	７０～７９	８０～８９	９０～９９
世帯数	４％	１０％	４％	１０％	７％

頭数	１００～１９９	２００～２９９	３００以上
世帯数	１０％	３％	３％

表２は、マンゴーラ村からエヤシ湖にかけて住むダトーガの人々から聞き取り調査した結果である。表１は、成牛だけの数であるのにたいして、表２は、牛と小家畜を含む、家畜の総数である。表２の世帯数は、調査対象である１１５世帯を分母としたパーセンテージで表している。

表１は、成牛だけの数であるから、未成牛や小家畜の数を含めると、１９６３年当時のダトーガが所有する世帯あたりの家畜の総数は、もっと多かったと考えられる。１９６３年当時から較べると、現在ダトーガが所有する家畜の数は、かなり減少していることが、表１と表２から分かる。また、表２で分かるように、１９８７～８９年の所有する家畜の数が４９頭以下の世帯は、全世帯中、６３％にもなる。生存に必要な最小限の家畜の数は、４６頭と見積もられている[21)]。この数字が正しいとすれば、現在のダトーガの人々に は生存のためのストレスが存在すると考えられる。一方、１９６３年当時は、表１に含まれない未成牛の数を考えれば、どうにか生存が可能になる牛の頭数を所有していたと考えられる。

現在、マンゴーラ村近辺に住むダトーガの人々が抱える生存のためのストレスに対して、彼らがとる方策のひとつは、潅漑耕作地への傾斜である。マンゴーラ村近辺でのダトーガの農業への傾斜は、１９６０年代にすでに観察されているが、近年の自然環境の変化に伴い、ますます加速している。そのほかに見られる方策は、山羊、羊などの小家畜への依存と食用植物の採取が観察できる。

２．３　ダトーガ社会での家畜

牧畜民であるダトーガの人々の社会関係の基本は、家畜の移籍で表現される人間関係と考えられる。しかし、前節で見たように、現在ダトーガの人々が所有する家畜は、極端に減少しており、家畜の移籍によって表現される社会関係は、現実的なものではなく、理念的なものになっていると考えられる。ただし、理念的なものになっているとはいえ、家畜の移籍で表現される社会関係が、いまでもダトーガの人々の行動規範にとって重要であることは疑いない。

たとえば、ダトーガ社会では、父親が死亡すると、後で述べるように実際は長男以外の者にも家畜は移籍することはあるが、父親の全ての財産をその長男が相続することになっている。しかし、息子は、相続した家畜を自由に処分することはできない。なぜなら、ダトーガ社会では家畜の「所有権」と「管理権」は別である。家長が所有する家畜は、彼の妻たちが分割して「管理」しており、いくら「所有」する家長でさえ家畜を、「管理権」を有する妻の承諾なしに自由に処分することができない[22)]。長男が、死亡した父親の財産を相続することは、同時に、父親の家族を保護する義務を全て、引継ぐことも意味する[23)]。そして、死亡した父親の所有である家畜のほとんどは、父親の妻たちがその「管理権」を有する。妻たちの家畜の「管理権」は、夫が死亡しようともそのままその妻たちが保持する。したがって父親から家畜を相続するからといって、息子は、父親が死亡すると同時に彼の自由になる家畜群が形成されるわけではない。息子は、その人生の様々な節目に彼の「所有」する家畜群を形成していく。また、息子は、機会をとらえて積極的に自らの家畜群を形成する努力を行なう。Ｔｏｍｉｋａｗａ１９７２に、１４の家畜の移籍の理由が記録されている[24)]。これら１４の理由の主なものとそのほかの理由のうちで重要と考えられる移籍の理由は以下のとおりである。

１。誕生
２。乳歯がはじめて生える
３。成年の儀礼
４。結婚
５。相続
６。ライオン狩り
７。貸借
８。友情の誓約

９。賠償

１０。掠奪

１１。交換

１２。購入

１３。独立

１４。困窮にたいする贈与

上で述べた家畜が移籍する理由は、全て、男に関するものである。たとえば、男の子がはじめて「乳歯が生える」と、父親や母親、あるいは、父親の親族、ときには、母親の親族から家畜が男の子に移籍する[25]。これは、男の子だけにであって、女の子は家畜を受け取ることはない。しかし、実際に家畜を「管理」するのは女であって、男は家畜を「管理」することはない。また、「乳歯が生えた」ばかりの乳児に家畜を管理できるはずはなく、家畜が移籍したとしても、実際に家畜が男の子の家畜囲いに移るのは、男の子が成長して自ら家畜を経営できる能力を身につけた時である[26]。それまでは、男の子に移籍された家畜は、そのまま「管理」されている家畜囲いにとどまるのである[27]。では、女は、どのようにして「管理」する自分の家畜群を形成するのだろうか。

２．４　ダトーガの女の結婚と相続

ダトーガの女は、全く家畜を相続しないし、所有しない。あくまでも家畜を相続し、所有するのは、男であって、女ではない。しかし、女は、自ら「管理」する家畜群を形成する。女が「管理」する家畜群を形成するのは、結婚を通じてである。では、女の観点からダトーガの結婚を、筆者自信の調査資料とＭｕｌｄｅｒ，１９９１から概観しよう。

娘が結婚適齢期になると羊の皮でつくられた肩コートとハナグエンダと呼ばれる皮のスカートを身につける。婚資は、白や黒ではなく、色のついた毛色の未経産の雌牛が１頭、花婿の父親から花嫁の父親に贈られる[28]。花嫁は、数日間、花嫁の友人たちとともに花嫁の小屋に閉じこもり、泣きくらす。定められた日の夜明けに、花婿と花婿の親族ととりまきが、花嫁の父親に迎え入れられ、花嫁と花嫁の友人たちと模擬的な戦いを演じる。花嫁は、頭からつまさきまで赤土が塗られ、花嫁の母親の背に皮ひもで結わえられ、屋敷の門まで導かれる[29]。ここで花嫁は立ち止まり、花嫁に与えられる家畜を父親や親族に要求する。要求が満たされるまで、花嫁はそれ以上、前に進むことを拒否する。ここで花嫁に父親、父親の親族、母親、母親の同僚妻、父母を同じくする兄弟から家畜が与えられる。

花婿の小屋への道中、花嫁は、花婿に家畜を要求する。花婿の屋敷の門まで到着すると、花嫁は、要求が満たされるまでは一歩も門をこえて屋敷に入ることを拒否する。このとき花嫁に花婿の母親、花婿の妻たちから贈られる家畜は、デーダ・ドシタ「門の牛」と呼ばれる。さらに、小屋の入り口をこえるときにも花嫁は家畜が与えられる。この家畜は、デーダ・ホータゲーダ「敷居の牛」と呼ばれる。つづいて、花嫁は、皮の肩コート、皮のスカート、首飾りを脱ぐときに、それぞれ花嫁に親族、姻族から家畜が与えられる[30]。さらに花嫁は、デーダ・アノーガ「ミルクの牛」と呼ばれる家畜が贈られる。このとき花嫁は、家畜が贈られる度に黒い牛を搾ったミルクを大きな瓢箪から飲まなければならない。このミルクには、花嫁が家出しないようにする呪薬が混ぜられている。贈られる牛が決定すれば、つぎは、山羊、羊というように、贈られる家畜が決定される度に花嫁は、ミルクを飲む。これが翌日まで、ミルクがなくなるまで続く。これらの贈り物が、花嫁の「管理」する家畜群の中核を形成する。結婚式の３日目、牛囲いのなかで若者たちが２頭の牡牛と雌牛を追い、花嫁のまわりを回らせる。

これらの花嫁に贈られた家畜を、花嫁はそれらの「所有権」を有するのではなく、「管理権」を有するのである。女たちは、この家畜群に属する牛の乳を搾り、幼ない家畜の世話をし、家畜群の拡大をはかる。その乳によって自活する[31]。

家長が死ぬとき、財産は、その長男によってすべて相続されるが、それはあくまでも「所有権」であって、家畜群にたいする「管理権」は、死亡した家長の妻たちがかわりなく保持する。

一方、前節で列挙した様々な家畜の移籍の理由にもとづき、男の子に贈られたとされる家畜は、その男の子が結婚をして妻を得ると、つまり、家畜を管理する能力をもつようになると、実際にその家畜囲いに移ってくる。それは、結婚式で花嫁に約束される家畜の一部であるかもしれない。このように、家畜の「所有権」は男から男へと移るが、その「管理権」は女から女へ移る。また、家畜そのものは、女が管理する家畜囲いから女が管理する家畜囲いへ移る。

3　おわりに、そして、再びフィールドへ

従来の研究で指摘されてこなかったことは、祖母が「管理」する家畜の祖母から孫への移籍がある。前章で列挙した１４の家畜の移籍の理由のなかで、男の子がはじめて乳歯が生えたときになされる家畜の移籍があった。これは、両親、母親の同僚妻、父親の親族、

ときに母親の親族から男の子に家畜が移籍する。このとき、父親あるいは母親の親族、とくに、祖母から孫に雌牛が移籍する。ただし、名目的な家畜の「所有権」は祖父から孫へ移るが、実際の「管理権」は祖母から孫の配偶者に移るということになる。移籍した家畜は、前章に書いたように、実際にはすぐにもとの家畜囲いから新しい家畜囲いへ移ることはない。男の子が家畜を管理する能力を身につけたときに、家畜は実際に移る。もし、男の子が実子であった場合、かれが成長して、家畜を管理する能力を身につけ、独立する日はさほど遠くはない。早婚であるダトーガ社会では、とくにそうである。ところが、男の子が孫であったら、その子が成長して独立する日は遠い。かれが家畜を管理する能力を身につけ、家畜が実際に移っていく日まで、家畜は、祖母の家畜囲いに留まることになる。祖母が、その家畜を管理し、その乳を消費する。祖母に男の孫が多く存在すればするだけ、多くの家畜が祖母の手許に長く留まることになる。年老いた男の妻となった何番目かの妻は、夫に先立たれるのが普通である。夫が死亡したあとも自らが「管理権」をもつ家畜群を管理し、経営している。そして、彼女の子供たちが成長していく過程で、かれらの人生に節目ごとに実際に家畜が移っていく。一方、彼女の孫に移籍された家畜が、実際に彼女の家畜囲いから出ていく日は遠い。孫へ移籍される家畜は、老いた女性の老後の生活を支える機能を果たすと考えられる。

バジュータの皮コートに描かれた模様からはじまったストーリーは、ダトーガの女の結婚と相続を明らかにした。しかし、ここで明らかにしたストーリーは、概念的なシナリオであろう。第1章で書いたように、ダトーガの人々をとりまく環境は、きわめて激しく変化している。とりわけ、第2章の第2節で書いたようにダトーガの人々、とくに、マンゴーラ村近辺の人々は、もはやここに書いたような家畜で表現される社会関係を実際に実現できるほど家畜を保有していない。かつては社会のなかで機能をはたしていただろう制度は、祖母と孫に間に存在する心理的に密接な関係を支持していた。いまではその機能をはたさなくなった制度だが、しかし、バジュータの女が身につける皮コートに描かれた「バジュータの星」は、その制度が支持していたダトーガの祖母と孫の間の心理的距離をいまでも表現している。「バジュータの星」の世界は、ダトーガの人々の観念の世界をみごとに映していると考えられる。そして、孫へ移籍される家畜が祖母の老後の生活を本当に支える機能を有していたかどうか、あるいは、いまでも機能を有しているかどうかはさらなるフィールドワークが明らかにするであろう。

4　追記

フィールドワークは、１９９６年１１月と１２月に、文部省科学研究費補助金（国際学術研究）研究課題番号０８０４１０１５により行なった。マンゴーラ村でフィールドワークを行なってはじめて、アフリカ研究を開拓した日本の研究者たちの息吹を感じることができた。このことが今度のフィールドワークの最大の収穫であったかと思う。とりわけて個々の人々にたいする謝辞は書かないが、この文章のなかに登場した人々の援助やご指導なくしては、フィールドワークがなしえなかった。あらためて感謝します。また、この文章のなかには登場しなかったが、アルーシャの町で筆者の精神的支えとなってくれた加藤一家に感謝します。

注

1）　筆者がフィールドワークに出発する前に、国立民族学博物館へ梅棹名誉館長をおたずねし、ダトーガ社会に入るにあたっての注意すべきことなどご教示を頂いた。また、富川盛道先生には、ダトーガ社会の構成などのご教授のほかに、マンゴーラ村へのアプローチ、村での住居、インフォーマントについての示唆など、具体的な手引きを電話などで伺った。筆者は、フィールドワークは、ただやみくもにフィールドへ入れば成果が得られるものとは考えていない。フィールドへ入る前に、文献リサーチなどのさまざまな準備を行なうことからフィールドワークは始まっていると考えている。この文章は、フィールドワークの手引きとなることを意識して書いた。

2）　梅棹１９９０ｅ、４７９頁。梅棹名誉館長からいろいろな示唆を頂いた。そのなかに、この皮コートがあった。筆者が深い思慮もなく、皮コートに描かれている模様に何か意味、あるいは、ストーリーがあるか梅棹名誉館長に尋ねたことが、この文章を書くきっかけとなった。梅棹名誉館長から筆者に与えられた宿題が、この皮コートに描かれている模様の意味を探ることになったのである。

3）　ダトーガの皮スカートについては、富川１９７７が興味あるレポートをしている。

4）　この皮コートについてのみ質問調査を、わざわざ行なったわけではない。ダトーガ語の語彙を集めているうちに、物質文化の項目に到ったのである。語彙を集めるのは、準備した調査票にのっとって行なうのだが、ことばだけの説明では、インフォーマントに尋ねたい物質文化の実物を理解させるのが容易ではない。このとき、梅棹１９９０ｅのよう

な物質文化の記録があればおおいに役にたつ。

5）　皮コートに描かれた二重の同心円は、たんに miŋwenda 「星」と呼ばれている。宵の明星は、ダトーガ語では、 miŋwenda haɔqan 「大きい星」であり、おなじ金星でも朝方に見える明けの明星は、 arɛru と呼ばれる。じつは、ダトーガ語の閉鎖音には有声と無声の音韻的区別はないので、/b/、/d/、/j/、/g/、/gh/といった音素は存在しない。音韻論的には、それぞれ、/p/、/t/、/c/、/k/、/q/で表記しなければならない。しかし、たとえば、実際の音声が[b]で発音される音を、音素表記だからといって、/p/で表記するのは、ダトーガ語の知識をもたない読者にとって親切とはいえないだろう。この文章では、言語学的には不統一ではあっても、できるだけ原音の発音に近い表記を採用することにする。さて、皮コートに描かれた二重の同心円模様がたんに「星」の総称で呼ばれていること、宵の明星が「大きい星」と呼ばれていることは、金星のダトーガ文化のなかでの重要な位置を想像させる。

6）　「バジュータの星」と名付けたのは、調査者であって、けっしてダトーガ語のなかにこの名前が存在するわけではない。この命名は、フィクションである。思わず興奮のあまり調査者が叫んでしまったのである。フィールドワークにはこのようなフィクションがどうしても、ついてまわるのではないだろうか。あとで書くように、命名するにしても「ダトーガの星」よりも「ダトーガの月」のほうが、相応しかったかもしれない。ただし、注４で書いたように、宵の明星がダトーガ文化のなかで重要な位置を占めているとすれば、直観的に「バジュータの星」と叫んだことは、的を射ていたのかもしれない。

7）　１９６１年からはじまった調査の経緯については、梅棹１９９０ｂが詳しい。富川と梅棹によってなされたダトーガ研究の蓄積は、国際的にも誇れるものであろう。また、その当時のマンゴーラ村の様子は、梅棹１９９０ａと和崎１９７７に描かれている。ただし、梅棹１９９０ａは、１９６３年のフィールドワークによっている。

8）　１９６１年当時の民族構成については、Ｔｏｍｉｋａｗａ、１９７０とＷａｚａｋｉ、１９７０が詳しい。

9）　ハッツァ語は、コイサン言語群に、ダトーガ語は、ナイル・サハラ言語群に、イラク語は、アフロアジア言語群に、バントゥ諸語は、ニジェール・コンゴ言語群に属する。アフリカで話されている４大言語群のすべての言語が一ヶ所で話されているという、複雑な言語社会をマンゴーラ村は示している。さまざまなバントゥ語を話す人々は、かれらの第２言語であるスワヒリ語の名前を使って総称的にスワヒリ人 mswahili/waswahili と呼

ぶことがあるが、詳しく質問するとかれらの第１言語で民族を同定している。たとえば、Ａさんはニャキューサ語を第１言語として話すのでニャキューサ人であるというように認識している。とくに、最近になって村に流入してきたバントゥ語を話す人々にたいする認識は、スワヒリ人ではなく、かれらの第１言語の名前を使った民族名で認識する傾向が強い。いっぽう、村に古くから入植した人々は、スワヒリ人と呼ばれる傾向が強い。このことから、バントゥ語を話す人々のうち、古くから村に入植した人々と最近になって入植した人々とのあいだには、異なる民族アイデンティティが存在する可能性がある。

１０）　自然環境の変化については、富田浩造ＪＩＣＡ専門職員から詳しく聞いた。富田氏は、１９６１年にはじまった調査隊のメンバーである。筆者が容易にフィールドへアプローチできたのは、富田氏の助けなしには考えられない。また、アルーシャでは、富田氏と富田夫人は、物質的にも精神的にも筆者の支えとなって頂いた。

１１）　富田氏によれば、１９９３年にはいったん泉はすっかりダムでせきとめられた。ダトーガの人々は、泉の水の利用権がもともとダトーガに所属していたと主張して、牧畜民であるダトーガと農耕民とのあいだに争いが生じた。政府の裁定により、ダムの一部が切り落とされたが、耕作面積の拡大は、ダトーガの森への後退を余儀なくさせている。ダトーガが森に後退するにつれて、もともと狩猟民ハッツァの人々の狩り場であった森には、いまや、獲物となる動物の姿はなく、家畜の足跡と糞だけになっている。

ダトーガには、「水の主人」 Bwana Maji とスワヒリ語で呼ばれる呪術者が存在する。「水の主人」は、泉にいる蛇の力を借りて、泉の水を枯らしたり、濁らせたりする能力があると言われている。「水の主人」がかれの能力を発現させるとき、女達の役割が大きい。ダトーガ社会では、女達が宗教的儀礼での役割を多くの場合、担っている。泉の蛇にたいする儀礼も女が行なう。また、社会に大きなストレスが生じた場合、女達が集合し、儀礼を行なう。そして、「水の主人」にたいして、一種のデモンストレーションを行い、かれの能力の発現を促すのである。１９９３年における水争いの場合にも、デモンストレーションはあったと言われている。

１２）　ハッツァの人々をとりまく環境の変化については、注１０を参照。

１３）　イラクの人々は、ダトーガの人々と婚姻関係を結ぶ一方で、ダトーガを追い出すさまざまな方法をもっている。ダトーガの家畜の通り道にウサギの死骸をおくと、ダトーガの人々はその通り道につながる牧草地を放棄してしまう。また、ダトーガの家の前にウサギの死骸の頭部を置いたりする。イラクの人々のダトーガを追い出す戦略については、

Ｌａｎｅ，１９９６を参照のこと。注１０で書いたダトーガの人々を農耕民とのあいだで起こった水争いの際には、イラクの人々はダトーガ側についたとなっているが、真相は微妙である。

１４）　ダトーガの人々の人口については、Ｔｏｍｉｋａｗａ，１９７０は、２７、７５８人という数字をあげている。

１５）　ダトーガの最近の民族移動の歴史と、地域集団（Ｔｅｒｉｔｏｒｉａｌ　Ｇｒｏｕｐ）の生成の歴史は、Ｔｏｍｉｋａｗａ，１９７０が詳しい。

１６）　Ｅｈｒｅｔ　１９７１を参照。

１７）　ダトーガ語の歴史については、この文章ではこれ以上、扱わない。

１８）　ダトーガの牧畜文化にかんしては、梅棹１９９０ｄとＴｏｍｉｋａｗａ１９７２、１９７８が詳しい。

１９）　梅棹１９９０ｄ、２７４頁から引用した。世帯主の名前等は省略。

２０）　Ｍｕｌｄｅｒ，１９９１から作成。

２１）　Ｍｕｌｄｅｒ，１９９１，ｐ．１７３。

２２）　家畜の管理と所有については、梅棹１９９０ｄを参照。

２３）　Ｔｏｍｉｋａｗａ，１９７２，ｐ．２０。

２４）　Ｔｏｍｉｋａｗａ，１９７２，ｐ．１５。

２５）　この時移籍する牛は、ダトーガ語でデーダ・ゲーシャトカ「歯の牛」と呼ばれる。

２６）　実際に家畜を管理するのは女であるから、妻の存在がなくしては、家畜の管理を行なうことはできない。男の子の家畜囲いに家畜が移るのは、彼が結婚をして妻をもっているか、あるいは、彼の家畜を「管理」する彼の親族の女が存在することが条件となるであろう。

２７）　家畜は、基本的に女たちがそれぞれの家畜囲いに管理するわけだから、たとえ名目的に移籍しようとも、女たちの家畜囲いにとどまることになる。

２８）　以前はもっと多くの牛が婚資としてもちいられていたようだが、近年の家畜の減少に伴い、婚資の牛の数はきわめて少なくなっている。

２９）　屋敷の門は、ドシタｄｏｓｈｔａと呼ばれる。ドシタという語は、同時に、氏族という意味を持っている。

３０）　デーダ・アグァダダバイト「皮コートの牛」、デーダ・ハナグエンダ「皮スカートの牛」と呼ばれる。

３１）　１人の家長の複数の妻たちは、それぞれが独立した「管理」する家畜群をもつ。それぞれの妻は、家畜管理とその消費の独立した単位をなす。詳しくは梅棹１９９０ｄを参照。

参考文献

Ehret, C.　１９７１　*Southern Nilotic History: Linguistic Approaches to the Study of the Past*, Norethwestern University Press. Evanston.

Lane, C.　１９９６　*Pastures Lost: Barabaig Economy, Resource Tenure, and the Alienation of their Land in Tanzania*, Initiatives Publishers, Nairobi.

Mulder, M. B. １９９１　'Datoga Pastoralists of Tanzania,' *National Geographic Research & Exploration* 7 (2):166-187.

Rottland, F.　１９８２　*Die Sudnilotischen Sprachen*, Dietrich Reimer, Berlin.

Tomikawa, M.　１９６６　'Locality group of the Datoga - A preliminary report concerning the social structure of pastoral Datoga,' *Kyoto University African Studies* 1:207-230.

１９７０　'The distribution and the migration of the Datoga tribe: The sociological distinction of the Datoga society in the Mangola Area,' *Kyoto University African Studies* 5:1-46.

１９７２　'Cattle Brands of the Datoga - Human relations in the Datoga pastral society in East Africa,' *Kyoto University African Studies* 7: 1-35.

１９７７　『一枚のスカート』「閉ざされた世界から（世界の女性史１４中東アフリカ」（板垣雄三編）、２９１－３３５頁

１９７８　'Family and daily life: An ethnography of the Datoga pastoralists in Mangola (1),' *Senri Ethnological Studies* 1:1-36.

梅棹忠夫　１９９０ａ　『サバンナの記録』「梅棹忠夫著作集第８巻アフリカ研究」

３７－１３５頁

１９９０ｂ　『アフリカ研究の１０年』「梅棹忠夫著作集第８巻アフリカ研究」、１５１－１９７頁

１９９０ｃ　『ダトーガ語ノート』「梅棹忠夫著作集第８巻アフリカ研究」、２３９－２６１頁

１９９０ｄ　『ダトーガ家畜社会における家族と家畜群』「梅棹忠夫著作集８巻アフリカ研究」、２６３－３１０頁

１９９０ｅ　『ダトーガ民族誌』「梅棹忠夫著作集第８巻アフリカ研究」、４０１－５０９頁

Ｗａｚａｋｉ，Ｙ．　１９７０　'On the tribes of Mangola Village,' *Kyoto University African Studies* 5:47-80.

和崎洋一　１９７７　「スワヒリの世界にて」、ＮＨＫブックス、日本放送出版協会